

ドゥルーズと法

『マゾッホ紹介』を読む

DELEUZE AND LAW Reading “Presentation of Sacher-Masoch”

志紀島 啓

基礎教育センター 非常勤講師

Kei SHIKISHIMA

Center for Liberal Arts, Adjunct Lecturer

要旨

哲学者ジル・ドゥルーズは『アンチ・オイディプス』において、自身の思想を体現する形象として「スキゾ」の概念を打ち出した。それに先立つ『マゾッホ紹介』（以下では PSM と略す）ではサディズムと対比しながら、マゾヒズムの論理が語られている。

PSM においてサディズムとマゾヒズムは、単に加虐・被害を好む性的倒錯を指しているのではなく、法規範に対する異った二つの脱構築的態度として記述されているのである。そこでマゾヒズムという概念はのちの「スキゾ」の原形であると考えられる。PSM ではドゥルーズの法規範に対する基本的な考え方が述べられている。ならば PSM を読解することによってドゥルーズの（反）法哲学を明らかにすることができるだろう。

本論ではドゥルーズが「マゾヒズム」と呼ぶ概念が（スキゾフレニーではなく）自閉症に近く、「サディズム」と呼ぶ概念がスキゾフレニーに近いことを示す。さらに法哲学の書として PSM を読解する以上当然であるが、マゾヒズムの政治について批判的に考察する。

Summary

Gilles Deleuze, a philosopher proposed the concept of “Schizo” as a figure that embodies his own thought in “Anti-Oedipus”. On the other hand, he explained his theory of Masochism in contrast to Sadism in “Presentation of Sacher-Masoch” (hereinafter referred to as “PSM”) that had been published prior to “Anti-Oedipus”.

In PSM, Deleuze described Sadism and Masochism not only as perverted sexuality seeking for behaviors to hurt someone or be hurt by someone else, but also as two deconstructive attitudes to the rule of law, i.e. the concept of Masochism is considered to be the prototype of “Schizo” that was introduced later. Also, Deleuze described his basic idea on the rule of law in PSM. Therefore, if we read PSM, we will be able to clarify Deleuze’s (anti-) philosophy of law.

In this manuscript, I will explain that the concept that is called “Masochism” by Deleuze is (not Schizophrenia, but) close to autism, while the concept called “Sadism” is close to Schizophrenia. Furthermore, I will critically comment on politics of Masochism since we read PSM as one of the books on philosophy of law.

はじめに

筆者は別のところでフランスの哲学者ジル・ドゥルーズの「スキゾ」という概念に再検討を加え、彼の思想が自閉症的(あるいは発達障害的)であり、その名辞の使用に反して、むしろスキゾフレニー批判となっていることを明らかにした^{注1}。「スキゾ」という概念はフェリックス・ガタリとの共著『アンチ・オイディプス』(1972)^{注2}において最も多用されるが、それに先立つ単著『マゾッホ紹介』(1967)^{注3}では、サディズムと対比しながらマゾヒズムの論理が肯定的に打ち出されている。20世紀のフランスの文脈においてはシュールリアリストによるサド再評価があり、サド全集が出版されるなどして、ポーヴォワール、バルト、バタイユ、クロウスキー、ブランショ、ラカンなどの面々がサド論を書いている。そうしたなかで、あえてサドよりもむしろマゾッホについて書くことを選択したドゥルーズには秩序への「侵犯」とは別の仕方での抵抗を探ろうとする意図があったものと思われる。

ドゥルーズは『マゾッホ紹介』において、サディズムとマゾヒズムの二項対立を立てたうえで、それぞれが法規範、否定性、フェティッシュ、父母、超自我などいかに異なった関係を持っているか、を順次記述していく。そして最後に11の命題として、ドゥルーズによる要約が示されている(F114-115J163)。ドゥルーズはそこで精神分析の用語も援用するのだが、現在のラカン派の用語法から見た場合、おかしな点が散見されるため、本論ではラカン派の用語法を用いて整理しながら内容を批判的に再検討していく。その際、同じ言葉あるいは似た言葉であっても、ドゥルーズとラカン派で意味が異なる場合が出てくるため、注意が必要である。

小倉拓也は『マゾッホ紹介』に関する論考^{注4}で「ドゥルーズの理論的変遷を見ると、このような「倒錯」の論理(何を指すかについては後述していく。:志紀島)が1970年代以降に分裂症化されていくというのは、確かに事実ではある」と述べている^{注5}。つまりドゥルーズの思想的キャリアにおいて「マゾヒズム」は「ス

キゾ」のプロトタイプと考えられるのである。これをラカンの用語法に依りつつ本論の立場から換言すれば、倒錯の一種であるマゾヒズム論は自閉症、発達障害論の原形ということである。『アンチ・オイディプス』に先立つ『マゾッホ紹介』はよりシンプルかつ明晰に「(ドゥルーズにとっての)マゾヒズム」を説明しており、同書を読解することによってドゥルーズのなかに貫く基本的な思考スタイルを明らかにできる、と思われる。

これまでラカン派の体系においては人間の精神構造は神経症、精神病、倒錯の三つに分類されてきた。神経症は抑圧、精神病は排除、倒錯は否認という否定的なメカニズムによってそれぞれ特徴づけられる、と考えられてきた。しかし昨今、社会状況の変化やテクノロジーの進歩などもあって従来の分類では理解しにくいケースが増えてきたため、新しい準拠枠がラカン派内においても唱えられ始めてきている。「普通精神病」(ジャック=アラン・ミレール)や「一般化倒錯」(コレット・ソレール)といった概念がそれである。本論はドゥルーズの倒錯論の批判的検討を目的としている。そこで噛み合った議論を展開するためにあくまで理論的手続きとして、自閉症(発達障害など)を一旦倒錯のカテゴリーとして論じることとする。すなわち、こうした選択はラカン派の一部の考えには従うことになるのだが、一般的には違和感が残ることだろう。倒錯という語は一般には性的倒錯を指す言葉であり、性的ニュアンス抜きには考えられない。他方、自閉症は多くの場合、社会性やコミュニケーション、認知の障害として理解されており性的ニュアンスがほとんど感じられない。この辺りは用語法の問題がいまだ解決していないわけであり、今後の研究によって、より納得のいく分類がなされることを期待したい。ともあれ自閉症を倒錯というカテゴリーで理解することによって、神経症と精神病のペアから構成される定型発達という枠組みの外としての非定型発達に関する議論を展開しようとしていることを理解していただければ、それで十分である。

またラカン派を離れて、昨今の自閉症研究の状況を見た場合、その原因に関してはかつての母親原因説(冷蔵庫マザーなど)は否定され、生物学的器質的な異常を原因とする説が優勢となってきた。この件に関しても、まだ当該分野の専門家たちのあいだで議論がなされ、結論には至っておらず、今後の研究の成果を待ちたい。

まず、有り得べき誤解を解いておかねばなるまい。サディズムとマゾヒズムは加虐と被虐を特徴とする性的倒錯として一般に理解されている。しかし『マゾッホ紹介』はそうした性的倒錯としてのマゾヒズムについて主に書かれた書物ではない。千葉雅也は次のように述べている。

『マゾッホ紹介』で行われているのは、実のところ<非フェティシズムとしてのサディズム>と<フェティシズムとしてのマゾヒズム>の対比なのであって、肝心なのは、加虐/被虐ではなく、フェティシズム論としての形態論ではないか^{注6}。

本論では、また少し異なったアプローチを行う。『マゾッホ紹介』はサディズムとマゾヒズム(あるいは、それぞれに付随するイロニーとユーモア)を、ともに法規範を逸脱する論理として捉えたいうえで、両者の法との関係を考察した著作なのである^{注7}。つまり『マゾッホ紹介』においてはドゥルーズが法をどのように考えていたか、ドゥルーズの法への基本姿勢が述べられている。したがって本論では『マゾッホ紹介』をドゥルーズの(反)法哲学の書として読んでいこうと考える。もちろん、本論でいう「法」とは刑法、民法といった狭義の実定法のみを指しているのではない。人間の日々の営みのあらゆる側面を規定する文化的規範、常識や礼儀など書かれていない規範をも含む広い意味で「法」という語が用いられる。またサディズム、マゾヒズムという語もあくまで「ドゥルーズにとっての……」という意味であり、ドゥルーズの用法は独自の

意味づけや形式化が施されているため、一般的な定義や他の論者とは異なった見解が述べられることがある点に注意が必要である。

イロニーとユーモア

ではサディズムとマゾヒズムはどのような関係にあるのだろうか? 例えば論文「子供がぶたれる」において、フロイトは次のように述べている。

さしあたり確認できたと思われるのは、マゾヒズムは欲動の一次的な表出ではなく、サディズムがその矛先を本人へ転じることに由来する、つまり対象から自我への退行によって成立するという点だ^{注8}。

これは反転論、あるいは変換論と呼ばれる考え方である。サド=マゾヒズムなどという呼称すらあるように、これは両者が一つの単位を形成して、相互補完的な関係にあり、同じロジックが別の現れ方をしたものとする見方である。しかし、ドゥルーズはこれに異を唱える。ドゥルーズによれば、サディズムとマゾヒズムは法に対する全く異なった二つの態度を意味している。ドゥルーズはそれらをサド的イロニーとマゾッホ的ユーモアとして定式化している。

より高い原理に向かって法を超え、法に二次的な力しか認めない運動を、我々はずっとイロニーと呼んでいる(F75J109)。

マゾヒストは単に反対側から法を攻撃しているだけである。法からより高い原理へ遡行する運動ではなく、諸帰結に向かって法から降りてしまう運動を我々はユーモアと呼ぶ(F77J111)。

法という構造に対して、破壊を通じてより高次の法を目指す運動(上向きの運動)がサド的イロニーであり、逆に端的に法から降りてしまう運動(下向きの運

動)がマゾッホ的ユーモアである、とされる。

イロニーとは、無限に高次の<善>の上に、何とかして法を創設しようとする思考の作用である。ユーモアとは、無限により適切なくまじなもの>によって法を制裁しようとする思考の作用である (F72J104)。

イロニーは純粋な理念を際限なく追求する態度であり、ユーモアはその場その場に応じた適切さを重視する現場主義とされる。ここにはドゥルーズの反プラトニズムが見て取れる。

否定と否認

さらにドゥルーズはサド的態度としての「否定」とマゾッホ的態度としての「否認」を対比する。

サディズムとマゾヒズムの根本的な違いは、一方では否定性と否定、他方では否認と宙づりという対応関係にある二つの過程としてあらわれている。所与ではけっしてありえない死の本能を把握する思弁的で分析的な方法を前者が代理=表象するならば、後者は神話的で弁証法的で、かつ想像的なまったく別の方法を代理=表象しているのである (F32J46)。

サディズムにおいては純粋な理念を目指して、現前する所与の対象は破壊=否定され、無が現出する。しかし、マゾヒズムはこれとは違う方法を取る。それはサド的否定に対して「否認」と呼ばれるだろう。「否認」はフロイトの精神分析に由来する概念なので、ここでフロイトによる説明を確認しておこう。

フロイトは「フェティシズム」(1927年)^{注9}において、フェティシズムと否認の関係について論じている(なお「フェティシズム」はフロイト精神分析の体系において倒錯のメカニズムを説明する理論として位置付けられている)。フロイトによれば、幼児にとって母

の去勢、すなわち女性にはペニスがないという事実を目にすることは、「自分もまた去勢されるのではないか」という不安を引き起こすため、恐るべきトラウマ的経験となる。そこで幼児はその事実を認めると同時に認めようとしなない。より正確には望ましくない事実の知覚があったことを知りながら、無意識のうちにその事実を認めることを拒もうとするのである。こうした心的メカニズムはしばしば大人になっても続く。精神分析ではこの両義的態度を「否認」と呼んでいる。その際、母のペニスの代理物として選ばれる具体的な対象がフェティッシュである。「フェティッシュとは女性(母親)のファルスの代替物なのである。男の子はこの女性のファルスが存在していると信じており、それが存在しないということをなかなか認めようとしなない」^{注10}とフロイトは述べている。ドゥルーズは「否認」にさらに積極的な意味づけを加える。

否認を、否定すること、あるいは破壊することとさえなく、むしろ、一種の宙づりや中性化の操作の出発点として理解すべきだろう。この宙づりや中性化は、現にそうであることの正当化に異議を申し立て、所与の彼岸に、所与ではない新しい地平を我々に開示することをその特徴とする (F28J41)。

ドゥルーズにとって「否認」とは、現にそうであることに反してでも、欠如なき母や自然を肯定することなのだ。「否認」とは否定性や欠如や破壊を否定することなのだ。さらにドゥルーズの記述から引用しよう。

世界を否定したり、破壊したりすることが重要なのではないし、まして理想化することが重要なでもない。世界を否認し、否認しながら宙づりにし、ファンタスムのなかに宙づりにされた理想的なものへ自らを開くことが重要なのだ。現実的なものの正当性に異議を申し立て、純粋で理想的な基盤を現出させること。そうし

た操作はマゾヒズムの法の精神に完全に一致している (F30J43)。

このようなドゥルーズの記述を受けて小倉拓也は端的にいう。

「否認」は、所与の何ものかを否定するのでも、それを超えようとするのでもない。そもそもそんなものを認めないのである^{注11}。

あるいはまた千葉雅也は次のように述べている。

否認とは、次のような操作である。この世界がこのようであるという「現実性」を認めない、しかし、破壊活動なしで、所与の素材を使って、もっと「理想的」である世界の形態を勝手に構築してしまう。この世界がこのようであることを、破壊的ではなく否定し、別のしかたを提案するのである^{注12}。

即ち、否認とは所与の現実を認めず、法から降りてしまい、闘うことをしないで、フェティッシュによって所与の現実とは異なるファンタスムを形成し、法の構造の手前に留まろうとする態度を指すのである。現実を離れたファンタスムとは欠如が欠如した世界である。こうした態度はラカン派精神分析がファンタスムの横断を分析の目標＝終結とする点とは正反対であることを指摘しておく。

ラカンの三類型

ここまでの考察からサディズム＝イロニー＝否定とマゾヒズム＝ユーモア＝否認という二つの系列が浮かび上がってきた。『マゾッホ紹介』においてサディズムとマゾヒズムはともに構造の外部を目指す態度として示されている。しかし、その方法は対照的である。前者を「上への超越」、後者を「下への超越」と言い換えることができるだろう^{注13}。

これに「精神病」「神経症」「倒錯」というラカン派精神分析による人間の精神構造の三類型を重ね合わせてみるとどうなるだろうか？ まず神経症を人間にとって基本的な構造と考えれば、精神病と倒錯はともに構造からの逸脱、即ち外部を目指す運動である。精神病と神経症はともに構造を前提とする定型発達であるが、倒錯＝自閉症は言語への参入に抵抗を示すという意味において、構造の手前に留まろうとする非定型発達である。また太陽に表象されるような高みの超越的一点を目指すイカロスの飛翔によって精神病は特徴づけられるが、神経症と倒錯にはそうした志向は存在しない。

すると今の段階ですでに次のような推測が成り立つ。所与の法の構造に相当するのは近代において多数派を構成する「神経症」であろう。純粋な理念を目指して、所与の法の構造を超えようとするサディズムは「精神病的」といえるだろう。そして所与の法の構造から撤退し、構造の手前に留まろうとするマゾヒズムは「倒錯(＝自閉症)的」ということができるだろう。

以下でより詳しく個別の特徴について検討する。

サディズムと精神病

ドゥルーズがサディズムの特徴として挙げているものはイロニー、死の欲動、反フェティシズムである。これらを順に検討していこう。

『マゾッホ紹介』においてイロニーはサディズムの特徴の一つとして言及されている。他方、精神分析の視点からすれば、精神病は象徴秩序の根拠となる「父の名」を持たないがゆえに、現前する秩序に対して自明性を抱くことができず、否定を繰り返し、その正当性を認めず、破壊しようとする。スキゾフレニーは「あらゆる社会的関係の根源に迫るイロニーを備えている」^{注14}とラカンは述べている。スキゾフレニーにとってあらゆる社会秩序は相対的であり、正当性の根拠を欠いているのである。このようにラカンによれば、イロニーは精神病とりわけスキゾフレニーの特徴と考えられている。したがってイロニーの観点からすれば

ば、ドゥルーズのいうサディズムとはラカンの精神病のことだと考えられる。

次に死の欲動はサディズムの破壊(=否定)を駆動するものとして扱われている(但し、ドゥルーズはより理念的なものを指し示すために「欲動」ではなく「本能」という語を用いている^{注15}のだが、本論ではラカン派精神分析の一般的用語法にしたがって「欲動」とする)。「否定的な欲動や部分的破壊の運動を倍加し、濃度を増すことによってしか、それをなすことができない」(F28J41)とドゥルーズは述べている。破壊を際限なく累積し、加速することで、経験的世界においては不可能な純粹否定としての無の理念を目指す。サディズムは不可能なものを巡る運動として構造化されているのである。こうしたサディズムのメカニズムを否定神学として理解することができる^{注16}。ラカンによれば精神病もまた否定神学的構造を持っている。「父の名」の排除によって実存的根拠を持ちえない精神病的主体は、通常なら「父の名」が占めるべき象徴界の根源が空虚となっている。その空虚を巡って死の欲動は蠢く。精神病は「父であるとはどういうことか?」という問いに適切な答えを見出すことが不可能なのだ。よって死の欲動がもたらす否定神学性という観点からも、ドゥルーズがいうサディズムは精神病的である。他方、おそらくマゾヒズムは否定神学とは異なる方法、否定神学批判として想定されていると考えることができる。

また精神病は父の名の排除の結果として、対象aの析出とファンタスムの形成ができないという特徴を持っている。つまり、マゾヒズムの特徴である「フェティッシュによってファンタスムを形成し、そのなかに留まる」ということができないのだ。フェティッシュは対象aが取りうる形態のひとつである。ファンタスムは致命的な享楽から主体を守るバリアの役割を果たす。したがってドゥルーズのいうマゾヒズムはラカンの精神病とは相容れない。ドゥルーズのマゾヒズム(のちのスキゾ)は、ラカンの分類では倒錯になるはずである。こうした矛盾はドゥルーズのスキゾがスキゾフ

レニーではなく自閉症である、と考えることで解消される。

「父の排除」は「父の名の排除」か?

一般に精神分析の文脈において「父」あるいは「母」という語は無論、生物学的意味ではなく、ノモスとピュシスの代理となる抽象度の高い対立概念である。父の系列となる諸概念とはノモス=構造、文化、否定、破壊、切断、分離などであり、母の系列とはピュシス=構造の外部、自然、肯定、創造、融合、包摂などである。『マゾッホ紹介』でのドゥルーズの用法もおおむねこれに従っている。しかし、ノモスを秩序、ピュシスをそれに対する無秩序とする考え方も可能である(このような男性的・女性的の二項対立はジェンダー論の観点から問題があるのだが、ここでは60年代のドゥルーズの用法に従うこととする)。

ではドゥルーズの「父の排除」とラカンの「父の名の排除」は同じものと考えてよいのだろうか? まずドゥルーズによれば、マゾヒズム全般においてファルスを持った母との関係から第三項となる父が排除されている(母が法も担うので象徴界から父は排除される)。この文脈での「父」とは、母と子の関係に割って入る否定性、つまり去勢を意味する。したがって、ここで父の排除とは去勢の脅威が排除されることを意味している。

他者のいない原初的狀態を目指す思想はドゥルーズのなかに一貫している。

ラカンのようにいうなら、他者の『排除』によって、他者はもはや他人として把握されなくなる。何故なら、他者にその場所と機能を与えることができる構造が欠如するからである^{注17}。

ここでいう他者とは主体の組織化された認識や欲望を可能にする条件となる構造のことである。法と言語の構造すなわち、ラカンの象徴界を指している。ここでドゥルーズはラカン用語である「他者の排除」を

「象徴界に参入しない」「構造以前」という意味で用いていることを確認しておこう。「他者の排除」は倒錯の条件である。しかし、ラカンは排除という語を父の名の排除以外にも用いており、排除という語が同じだからといって直ちに混同してはならない^{註18}。

またドゥルーズは「父のイメージは、サディズムにおいて決定的である」(F50J73)とも言い、マゾヒズムにおいては「父は排除され、無効にされている」(F54J78)とも述べている。サディズムにおいて重要な役割を果たす「父」がマゾヒズムにおいては排除されている。即ち、この文脈での「父」とは所与の秩序＝構造に対して、破壊的に作用する力を指していると考えられる。「猛り狂い、切り裂くような分子から構成され、無秩序とアナーキーをもたらす、支配や法を超えた本源的自然が自らの内にあることを、父は立証する」(F52J76)。とドゥルーズは明確に述べている。ここでいう「父」とは「死の欲動」を内に秘めた存在なのである。

上記二種類の文脈においては、いずれも父は否定性(想像的母子関係に介入する去勢の脅威と象徴的秩序を破壊する死の欲動)である。父の排除とは母と子の関係、さらには母が作る象徴秩序を肯定し、安定させることにつながる。すると(額面上の言及はあるものの、実のところ)理論的にはドゥルーズはラカンの「父の名」に相当するものについては語っていないことになる。

ではラカンの「父の名」について確認しておこう。ドゥルーズは註17(F57J191)において、ラカンの父の名の排除にわずかながら言及しており、それが象徴界のメカニズムであること、母親病因論とは無縁であること(つまり自身の理論との差異)を確認している。ラカンの理論において、象徴界とは生き生きした自然に対する否定性の体系である。「父の名」とはシニフィアンの体系としての象徴界全体を統御し、安定させる超越論的シニフィアンである。逆に、この「父の名」が「排除」される事態とは人格あるいは世界全体が崩壊の危機に晒されることである。ドゥルーズは超越論

的シニフィアンや否定神学的構造を理論的に受け入れたくないのだ。

最も進んだ研究において、精神分析は象徴的秩序の創設と「父の名」とを関連付けているのだが、それをみて驚くのは当然である。母は自然に属し、そして父は文化の唯一の原理であり、法を代理＝表象するものだというのは、奇妙にも分析があまりなされていない観念を持ち続けることではないだろうか？ マゾヒストは象徴的秩序を母との関係として生き、そしてその秩序の中で母が法と一体となる条件を確立する(F56J83)。

ドゥルーズはこのように述べて、マゾヒストにあっては父無しで母が法＝象徴的秩序も担うという考えを示している。つまり、母が父を偽装し、あくまで否定性によらずとも自然の延長として法が創設されるというのだ。このような思想もまたドゥルーズのなかに一貫するものである^{註19}。すると「父の排除」と「父の名の排除」はそれぞれが安定化と不安定化という正反対的作用をもたらすことになる。仮にドゥルーズの「父の排除」とラカンの「父の名の排除」を同じ意味に理解してしまうと、マゾヒズム＝倒錯を精神病に近づけてしまう結果になるだろう。しかし、この二つは発達論的段階の失敗としても異なるものである。ドゥルーズによってマゾヒズムの特徴とされる「父の排除」は、ラカンによって精神病の原因とされる「父の名の排除」とは無関係であることを確認しておく。

超自我とマゾヒズム

ファンタスムに関わる問題は超自我を巡る問題に直結している。ラカンによれば、ファンタスムを形成できない精神病的主体の特徴の一つは超自我の声をそのまま聴いてしまうということである。「超自我を除いて何物も人に享楽を強いることはない。超自我、それは享楽の命法である。享楽せよ！」^{註20}とラカンは述

べている。しかし、ドゥルーズのいうマゾヒズムは全く逆の病態を示すものとして描かれている。これまで述べてきたように精神病は対象 a の分離ができず、ファンタスムを形成することができない。これはすなわち超自我の声をダイレクトに聴いてしまう、享楽を弱めるファンタスムがないために、そのまま致命的な享楽に襲われてしまうことを意味している。他方、ドゥルーズは超自我について次のように述べている。

マゾヒズムに何ものかが欠けているとするなら、それはいささかも自我ではなく、超自我の方である (F105J151)。

サディストには強力で圧倒的な超自我がそなわっているが、しかし、あるのはその超自我ばかりだということである (F106J151)。

マゾヒズムには超自我が欠けており、サディズムは超自我が過剰だ、というのだ。超自我の問題を考え合わせるならば、ドゥルーズのマゾヒズムを精神病に近づけて理解することには無理がある。むしろサディズムの方こそ精神病的といえるだろう。

また超自我に関連した文脈において、ユーモアについてもドゥルーズの論は混乱を示している。1928年の論文「フモール」(＝ユーモア：志紀島)のフロイトによれば、ユーモアとは自我が苦しい状況にあるときに「たいしたことはない」と勇気づけてくれる超自我の働きを指している。

フモールは次のように言おうとしているのだ、ほら、世界はとても危険に見えるけど実はこんなものなんだよ、子供の遊びなんだから、茶化してしまえばいいんだよ、と。怯えている自我にフモールで優しく元気づけるように語りかけるのが本当に超自我であるとすれば、私たちは、超自我の本質に関してまだ色々と学ばなければならないと自らを戒めなければならない^{注21}

しかし、ドゥルーズは「我々は、ユーモアというものがフロイトの思惑どおりに強力な超自我を表現するとは思わない」(F107J153)として、フロイトとの見解の相違を明らかにし、ユーモアと超自我の関係を否定している。むしろ、ドゥルーズによれば「ユーモアとは、超自我に対する自我の勝利なのだ」(F107J153)。つまり、そもそもユーモアの定義がフロイトとドゥルーズで違っていると考えるしかないだろう。ともあれ、ここではドゥルーズがフロイト学説に依拠して、これまでのフェティシズムとしてのマゾヒズム論を構築しておきながら、ユーモアに関してはフロイトのテーゼと用語法に反してでも、自身が肯定的に打ち出す論理には「超自我」を組み込みたくない、という欲望があることを確認しておく。

欠如の思想批判とは？

ドゥルーズはのちの『アンチ・オイディプス』(1972年)において精神分析を「欠如のイデオロギー」として強く批判している。確かに精神分析はファルスや去勢といった欠如や否定性を中心としたシニフィアンの構造によって無意識を説明する。これに対してドゥルーズは「無意識はオイディプスも去勢も知らない」と応じるだろう。他方、ドゥルーズは海や草原に表象されるような大いなる連続性、母なる全体性を強調する。しかし、ドゥルーズの思想的キャリアを『マゾッホ紹介』まで遡るならばどうだろうか？ 『マゾッホ紹介』の段階のドゥルーズは、フロイトの精神分析から去勢の理論そのものである倒錯のメカニズムの説明を借用し、それに全面的に依拠している。すでにみたように、そこでは確かに母の去勢という事実を否認することによって、欠如なき全体性(というファンタスム)が形成される、という論理が展開されているのである。つまり、この後で展開されるドゥルーズの全体性の議論、それ自体が去勢を否認した結果得られたファンタスムであることを、この段階でドゥルーズ自身が認めてしまっている、と読むことが可能なのである。すなわち

ドゥルーズ的な全体性(=欠如なき世界、大海、自然)はフロイト的否認の結果生み出されたファンタズムに過ぎないというのが、『マゾッホ紹介』の(意図せざる)結論である、ということができるのである。

結論 1

以上検討してきたように、ドゥルーズのマゾヒズム論に一貫する特徴は法の構造から降りて法の手前でファンタズムのなかに留まることである。小倉拓也はそれを「一切の組織化の原理の手前へと向かうマゾヒズム的な『倒錯』の論理」^{註 22}と呼んでいる。またドゥルーズは欠如や否定性を認めようとせず、超越論的シニフィアンや超自我や否定神学システム、超越や現実的なもの、父なるものからは一貫して逃れようとしていることがわかる。『マゾッホ紹介』では“tourner”という語が何度か用いられている。これは自動詞と他動詞、両方の意味を持つ語である。例えば“il《tourne》la culpabilité”(F79J113)という文言がみられる。“culpabilité”は一般的には有罪性や罪悪感を意味するが、特に精神分析の文脈においては「自我に対する超自我の批判的關係」を指している(小学館ロベール仏和大辞典編集委員会、『小学館ロベール仏和大辞典』、小学館、1988より)。したがって“tourner”には「逃れる」「回避する」といったニュアンスが含まれてくる。つまり、ここでは「超自我から来る罪悪感をそらす」のである。現実的なもの、父なるものを回避するのである。これは現実的なものと対峙し、雷に打たれるように、「父であるとはどういうことか?」という問いに捕えられてしまう精神病とは全く異質なのだ。

いまや我々はドゥルーズのマゾヒズムの論理がけっして精神病的なものではなく、むしろ非定型発達のカテゴリーとしての自閉症的あるいは発達障害的なものである、と結論づけることができるだろう。

マゾヒズムの政治

ここまで我々は『マゾッホ紹介』をラカン派精神分析の読解格子を援用しながら、法哲学の文献として読

解してきた。法哲学を実地に適用したならば、それは政治になる。マゾヒズムの政治を考察することは、本論にとって当然の帰結である。むしろ、「実地での飛躍」(F103J147)や「帰結に向かって降りること」(F77J111)を謳いながら、「マゾッホ作品全篇に農耕的共産主義の夢が認められる」(F83J120)といったわずかな指摘を除けば、ドゥルーズがそれを避けていることの方が奇妙ではないだろうか。

ただし、倒錯のカテゴリーとしてのマゾヒズムを自閉症に結びつけたうえで、それを直ちに集団に適用させようとした場合にある問題が生じる。自閉症はコミュニケーションが困難であり、孤立する傾向にあると思われるのに対して、ヤンキー(詳しくは斎藤環の用法にしたがって後述する)はコミュニケーションに長けており、集団を形成しやすいという点である。しかし、こうした問題があるにもかかわらず、マゾヒズム論を集団に適用した場合、構造的に奇妙な一致点が多く認められるため、それを考察することが無駄とは思われない。もともと構造という切り口で考察を進めている以上、個と集団の差異を認めないということが前提である。また自閉症はその症状から孤立、受動、奇異の三類型に分類される。他人と一切接触せず、自分の殻に閉じこもっている状態だけが自閉症なのではない。むしろ奇異型のように他人と積極的に関わろうとするが、相手の都合や気持ちを考えないで自分の衝動だけで周囲を振り回すタイプもある。日本語の自閉症という名称は誤解を招きやすいため必ずしも適切ではないのである。

ドゥルーズの思想はアナーキーの思想などと理解されることがある。グローバル資本主義に抗するマルチチュードについて語られたハートとネグリによる『帝国』^{註 23}などがその典型である。しかし、それらはガタリを経由したものであって、元来のドゥルーズは非政治的独我論者だとする見方もある。非政治的ドゥルーズとは関わらないドゥルーズである。関わらない思想としてドゥルーズを読む方法も確かにある。バートルビー論^{註 24}に注目する流れがそれだ。本論が扱って

いるマゾヒズムもまた権力と闘わない、ささやかな抵抗の思想として読むことができるし、おそらくその意図のもとに書かれている。しかし、さらに別のしかたでこれを読んでみる必要がある。つまり、闘わないことの政治性、非政治的であることの政治性とはいかなるものか?ということである。

マゾヒズムの戦略

しかし、そもそもマゾヒズムの戦略は政治的に有効なのだろうか? マゾヒズムの戦略として直ちに想起されるのはスラヴォイ・ジジェクが『ポストモダンの共産主義』の序文のなかで提示している猥雑なジョークである^{注25}。この挿話において確かに農夫は圧倒的な力を持ったモンゴル兵の命令に従わず、うわべだけ従う振りをした。農夫は確かにモンゴル兵の裏をかいたのだ。しかし、それはどれほど相手にダメージを与えることができたのだろうか? ジジェクはこの悲しい挿話が元はノーメンクラトゥーラに対する反体制派の自画像であったことを示し、さらには現在のグローバル資本主義下の世界において、危機に瀕した左派全般も同じではないかと指摘している。結局のところ、反体制運動としてのマゾヒズムの戦略は上記のような微力なものでしかない^{注26}。反体制派や民衆といった政治的に弱い側にとってマゾヒズムの戦略は敗北を運命づけられている。

しかし、今考えなければならないことは、マゾヒズムの戦略を権力サイドが取ったならばどういうことが起こるか、ではないだろうか? そして何よりも悪いことに権力側がマゾヒズムの戦略を取るならば、その力は強大であるため、彼らのファンタスムは単なるファンタスムに留まらないで、近代的法体系が実際に根本からねじ曲げられてしまうのだ。

近代的な国家制度は憲法によって国家権力の行使に一定の歯止めを掛けている。これを立憲主義という。国家機関や政党や政治家が憲法の規定を超えて政治を行うことは基本的に許されていない。憲法と国家権力との関係において、国家権力の側がマゾヒズムの戦略

を取ったならばどうなるのか? 憲法違反が罷り通り、憲法は有名無実となる。国家の根幹となる構造がなし崩し的に解体されてしまう。これは今我々の眼前に繰り広げられている光景ではないだろうか?^{注27}

ドゥルーズの全体主義、あるいはヤンキー・ドゥルーズ

ドゥルーズの思想に全体主義をみる論者としてはフランスの文脈においてはアラン・バディウがいる。かつてバディウをはじめとするマオイストたちはリゾームを「ジャガイモのファシズム」と呼んで批判した。また日本においては宇野邦一が批判的見地からではあるが、リゾームを天皇制として捉える見解を紹介している。

中心のない、またはいたるところに中心を分散させたリゾーム的な組織は(そして「器官なき身体」の発想は)、なんら新しいものではない、それはむしろ日本的なもの、いや日本そのもの、象徴天皇制になってもまだ持続している日本的な政治体制や心性そのものだという指摘(……)

^{注28}。

さらに宇野は政治学者・丸山眞男の古事記論である「歴史意識の『古層』」^{注29}、とりわけそこでキーワードとされている「つぎつぎになりゆくいきほひ」に触れ、次のように述べている。

「つぎつぎになりゆくいきほひ」は、やっかいなことに一見してリゾーム的なものだ。リゾームもまた植物をモデルとし、つぎつぎに自生的に生育し増殖していく組織であり、そのような「勢い」そのものである。中心も主体もない組織であるという点でも、リゾームは日本的な「執拗低音」に呼応する。そして丸山がいう「執拗低音」としての「つぎつぎになりゆくいきほひ」はむしろユングが語ったような根源的集合無意

識としての「リズム」にあたり、しかもドゥルーズ=ガタリが考案したような「リズム」の論理的特徴をあわせもっているようなのだ³⁰。

一方、精神科医・斎藤環もまた丸山の同じ論文に注目している。一連のヤンキー論^{31 32}において、斎藤はヤンキーを非行や暴力とは分けて理解した上で、その美学の具体的特徴を「気合とアゲアゲのノリさえあれば、まあなんとかなるべ」という空疎に前向きな感性としている。斎藤の見解によれば、これは丸山が喝破した日本文化の古層にある「つぎつぎになりゆくいきほひ」の歴史的オプティミズムに等しい。

一見気がつかないかもしれないが、和語「つぎつぎになりゆくいきほひ」はおおよそ次のように変換して理解できる。「つぎつぎに」は超越的永遠には向かって行かない、いまここが連続する時間感覚を示しており、「持続 (durée)」という概念に等しい。「なりゆく」は「つくる」とは正反対の、行為の主体も目的もない「なること」であり、「生成 (devenir)」に当たる。「いきほひ」は、創造主も起源もなく、意味にも象徴にも捉えられない空虚なエネルギーそのものであり、「強度 (intensité)」に等しい。これらはいずれもベルクソン=ドゥルーズの重要タームである。すなわち丸山の古事記読解のキー概念「つぎつぎになりゆくいきほひ」を媒介とすることで、ドゥルーズの思想とヤンキーの美学は日本の反近代性という文脈において接続されるのである。

従来から日本におけるフランス現代思想の受容状況のなかで、「ポストモダンとは何か？」という問いに対して、「近代の諸成果を踏まえたうえでの近代批判、さらなる近代の徹底」と「一見、近代を超えるかのようにみえて実は前近代への退行」の二つが考えられた。本来のポストモダンは前者であり、後者は悪しきポストモダンとして否定されるべきものであるはずだった。しかし、マゾヒズム論を読む限り、ドゥルーズが主張するのは明らかに後者なのである。

確かに契約関係は人工的、アポロンの、男性的文化の関係のまさに典型であって、我々を母と女性的なるものに結びつける自然な、冥府の神々によるつながりを妨げるものである。

(F80J116)

もう一度確認しておくけれども、父=男性=契約=理念という系列に母=女性=自然=情念という系列が対立している。右傾化や全体主義化と呼ばれる現象は軍備拡張や家父長制と結びつけられることが多いので、父権的、男性的と思われるかもしれないが、規範や原理や普遍性による集団形成ではなく、地縁血縁や関係性を重視し、反知性主義、反近代主義であるところから定義上むしろ母権的、女性的ということになる。ヤンキー論における斎藤環の用語法もほぼこれに等しい。

マゾヒストは父を排除し、母との近親相姦的關係を求める。これを政治的文脈に移せば、国家から近代的諸価値を排し、血と大地、神話と伝統といった美的価値を求めるということである³³。マゾヒストにとって母との近親相姦的關係、欠如なき理想のファンタスムとはそういうことだ(他方、近代国家は欠如を前提とし法によって補填を行う)。ドゥルーズによれば、そこで重要なのは「典礼」である。「現実性がファンタスム化される要因を、典礼が代理=表象する限りにおいて、典礼はマゾヒストの活動なのだ」(F80J118)。例えばナチスの場合、松明行列、焚書、党大会、オリンピックなど大衆を動員し、集団で行われる巨大イベントによって人々の優越感と一体感を掻き立てた³⁴。これらは「湿地や草原で催されていた最古の典礼と同じものを叙述している」(F89J128)。

もう一つのマゾヒズム論

ドゥルーズには『マゾッホ紹介』の他にもう一つマゾヒズム論がある。論文「ザッヘル・マゾッホからマゾヒズムへ」³⁵がそれである。もちろん論文であるから量は少ないが、内容的には重なる部分が多く、『マゾッホ紹介』のプロトタイプと考えられる(つまり、

「スキゾ」のプロトタイプが『マゾッホ紹介』である
と考える立場からすれば、論文「ザッヘル・マゾッホ
からマゾヒズムへ」はプロトタイプのプロトタイプと
いうことになる)。それでも『マゾッホ紹介』(1967
年)とそれに先立つ論文「ザッヘル・マゾッホからマゾ
ヒズムへ」(1961年)のあいだにはいくつかの差異が認
められる。とりわけ後者においては極めて強力に母性
回帰の論理が展開されている。特に看過することがで
きないのは、母への退行が肯定的に語られ、ユングか
らの引用が肯定的になされるという点である^{注 36}。論
文「ザッヘル・マゾッホからマゾヒズムへ」は当初雑
誌に掲載されたが、単行本『マゾッホ紹介』において
加筆修正された(Repris)という理由から、それ自体
が論文集の一部として公刊されることはなかったため、
ドゥルーズ研究者のあいだでもあまり知られていなか
ったテキストである。つまり、これほどまで明け透け
に母への退行とユングを讃える文書は長らくほとんど
隠蔽されていたのだ。

マゾヒズムによって形成される女性像は母権的、太
古的、神話的、異教的などと形容されている。もし、
これらのマゾヒズムの女性像を直ちに政治的文脈に移
したならば、どうなるだろうか？ 近代においては国
家と国民の関係は法に基づくものである。しかし、近
代法の体系という現実を無視して、国家が母権的、太
古的、神話的、異教的なものに生成変化するというフ
ァンタズムからはファシズムを想起しない方が困難で
ある。一見したところ、ファシズムには軍備拡張や他
国への威嚇、干渉、侵略といったタカ派的振る舞いも
あるけれども、全体としてみれば男性的法と理念とい
うよりも、女性的身体性や情念が優先された結果と考
えられる。マゾヒズム的国家もまた近代的法理念を根
本的に否認するものに他ならない。

結論 2

ドゥルーズ哲学のなかの全体主義は極めて大きなテ
ーマであり、ドゥルーズのコーパス全体の批判的再検
討を必要とする作業である。本論の目的はあくまで『マ

ゾッホ紹介』の読解であるから、初期ドゥルーズの法
哲学のなかに全体主義の萌芽があることを確認できれ
ば、それで十分である。『マゾッホ紹介』の段階におい
て、ドゥルーズはヤンキーであり、ドゥルーズの思想
は潜在的に全体主義を秘めている。この二点を指摘し
て後半部の結論としたい。

*引用の際にすでに邦訳があっても、原文から新たに
訳しなおした箇所がある。

注

1 志紀島啓、「ドゥルーズ：最も潜在的な自閉症 「スキ
ゾ」概念の再検討」、『日本病跡学雑誌』、No.91、2016、
pp.31-45 なお結論は以下のとおりである。

<ドゥルーズの「スキゾ」とは自閉症との混交概念であ
り、かつその重心はむしろ自閉症の側にあり、ドゥルー
ズはスキゾフレニーの固有性としての「父の名」の不在、
すなわち構造の根源における否定性こそを批判の対象と
していた、と言えるだろう>p.42

2 Gilles Deleuze, Felix Guattari, *L'Anti-OEdipe: Capitalisme et schizophrénie 1*, Minuit, 1972 (宇野邦一
訳、『アンチ・オイディプス 資本主義と分裂症 上・下』、
河出書房新社(河出文庫)、2006)

3 Gilles Deleuze, *Présentation de Sacher-Masoch: le froid et le cruel*, Minuit, 1967 (蓮實重彦訳、『マゾッホと
サド』、晶文社、1973)

本論ではフランス語原題の訳に近い『マゾッホ紹介』
をタイトルとして用いる。また『マゾッホ紹介』からの
引用は頻度が高いため、本文中にフランス語原書と邦訳
との該当ページを次のように示した。(F**J**)

4 小倉拓也、「ドゥルーズにおける「倒錯」の問題—1960
年代におけるその展開と帰結—」、『年報人間科学』、第 33
号、2012、pp.75-88

5 本文引用箇所が続いて小倉は次のように結論づける。
<「倒錯」の問題はドゥルーズにおいて分裂症よりはる
かに古い歴史を持っており、単に 1970 年代に放棄され
たわけではなく、様々な点において前期から後期へとド
ゥルーズの思想全体に通低するテーマをかたちづかつて
いるのである>同上論文 p.83

本論は『「倒錯」の問題は(中略)ドゥルーズの思想全
体に通低する』との小倉の見解に同意したうえで、1970
年代以降の分裂症化(に見える記述)すらも、スキゾと
いう名辞の使用に反して倒錯=自閉症的なのだ、という
立場である。

6 千葉雅也、『動きすぎたはいけない』、河出書房新社、
2013、p.320

7 「イロニーとユーモアとは、本質的に法の思想を形成する」(F72J104)と明確に述べられている。また「サドとマゾッホは、法への異議申し立て、その徹底的な転覆という二つの壮大な企てを代理＝表象している」(F75J109)ともある。

8 Sigmund Freud, *Ein Kind wird geschlagen*, *Gesammelte Werke* Vol.12, Fischer Verlag, 1947, p.214 (三谷研爾訳、「子供がぶたれる」、『フロイト全集 16』、岩波書店、2010、p.139)

9 Sigmund Freud, *Fetischismus*, *Gesammelte Werke* Vol.14, Fischer Verlag, 1948, pp.309-317 (石田雄一訳、「フェティシズム」、『フロイト全集 19』、岩波書店、2010、pp.275-282)

10 同上書 p.312(邦訳 p.276)

11 前掲論文 4、p.78

12 前掲書 6、p.310

13 アラン・バディウはドゥルーズの「潜在性」の概念を、上への運動を連想させる通常の超越とは分けて、「下への超越」としている。Alain Badiou, *Deleuze La clameur de l'Être*, Hachette, 1997, p.70 (鈴木創士訳、『ドゥルーズ存在の喧騒』、河出書房新社、1998、p.72)

14 Jacques Lacan, *Autres Écrits*, Seuil, 2001, p.209

15 <フランス語では、この超越的で沈黙する審級を指し示すのに「本能」、死の本能という言葉をとっておくべきだと思われたのである> (F100J143)

16 日本では三島由紀夫の文学作品、とりわけ『金閣寺』『サド侯爵夫人』さらには『文化防衛論』などで展開される独特な一連の天皇論において、この構造が顕著である。

17 Gilles Deleuze, Michel Tournier et le monde sans autrui, *Logique du sens*, Minuit, 1969, p.359-360 (小泉義之訳、「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」、『意味の論理学・下』、河出書房新社(河出文庫)、2007、p.239)

18 松本卓也、『人はみな妄想する』、青土社、2015、pp.158-168に、Jean-Claude Maleval に依りつつ、ラカンの「排除」という語の三つの用法に関する極めてシャープなまとめがある。

19 最初期の「本能と制度」において、禁止の体系として法制度があるのではなく、制度は満足を得るための手段として作られた、との立場を表明している。Gilles Deleuze, *Instincts et institutions*, *L'Île déserte et autres textes: Textes et entretiens 1953-1974*, Minuit, 2002, pp.24-27 (加賀野井秀一訳、「本能と制度 序」、『哲学の教科書』、河出書房新社(河出文庫)、2010、pp.75-81) また『アンチ・オイディプス』では「想像界と象徴界を連続したものとして捉える」旨の記述がある。前掲書 2、p.98 (邦訳上 p.161)

20 Jacques Lacan, *Encore*, Seuil, format de poche, 1999, p.11

21 Sigmund Freud, *Der Humor*, *Gesammelte Werke*

Vol.14, Fischer Verlag, 1948, p.389 (石田雄一訳、「フモール」、『フロイト全集 19』、岩波書店、2010、p.273)

22 前掲論文 4、p.83

23 Michael Hardt, Antonio Negri, *Empire*, Harvard University Press, 2000 (水嶋一憲、酒井隆史、浜邦彦他訳、『<帝国> グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』、以文社、2003)

24 Gilles Deleuze, *Bartleby, ou la formule*, *Critique et Clinique*, Minuit, 1993 (守中高明、谷昌親訳、「バートルビー、または決まり文句」、『批評と臨床』、河出書房新社(河出文庫)、2010)

25 Slavoj Žižek, *First as tragedy, then as farce*, Verso, 2009, pp.6-7 (栗原百代訳、『ポストモダンの共産主義』、筑摩書房(ちくま新書)、2010、pp.16-17)

冗談の内容は次のとおりである。十五世紀、モンゴル占領下のロシアで農夫が妻を連れて歩いていた。そこへ馬に乗ったモンゴル兵がやって来た。彼は農夫に命じた。「今からおまえの女房を犯す。そのあいだ、俺の睾丸が汚れないようにおまえが手で支えろ」。事を終えてモンゴル兵は走り去った。すると農夫は喜んだ。驚いた女房に農夫は答えた。「一杯喰わせてやったぞ、あいつの睾丸は埃まみれだ」。

26 では、何をなすべきか? ジジエクは次のように述べている。

<なすべきは、満を持しての直接対決で去勢を敢行することではなく、根気強くイデオロギー批判を重ねることで権力者の支配力を弱めていき、まだ権力の座にある当局が、ふと気づいたときには声高な叫びに悩まされるようにすることだ>、同上書、p.7(邦訳、p.18)

27 立憲主義を無視し、憲法に勝手な解釈を加えることで、憲法を生成変化させ、異質な個体を生み出す。うわべだけ法律に従う振りをしながら、法を形骸化させる。議会で質問を受けはするものの、訊かれたことには答えず、関係ないことで時間を浪費し、論点をすり変えてしまう。そのような態度によって国権の最高機関である議会を宙吊りにしてしまう。「丁寧に説明する」と口では言っておきながら、実際には逃げ回り、ようやく公開の場に現れてもまともな答弁すらしない。記者会見は予め申し合わせたように決められた記者の質問しか受け付けず、答えは官僚によって書かれたペーパーを棒読みするだけである。「批判には当たらない」「まったく問題ない」という回答はコミュニケーションの遮断、凝固でしかない。法と倫理に基づいて国民を論理的に説得しようという姿勢ではないのだ。疑惑については「一点の曇りもない」はずが、開示される公文書はほとんど全てが真っ黒に塗りつぶされている。一方で身内、支援者、同調者には法を無視してまで様々な便宜が図られる。リベラルデモクラシーをうわべだけ標榜しながら、実際には近代国家にとって不可欠な諸価値(自由、民主主義、人権、国民主権、三権分立、法による支配など)を骨抜きにしていく。ド

ゥルーズ的ユーモアとは、法にうわべだけ従う振りをしながら、法をその解釈によって嘲弄することなのだ。

²⁸ 宇野邦一、『ドゥルーズ 群れと結晶』、河出書房新社、2012、p.12

²⁹ 丸山眞男、「歴史意識の『古層』」、『丸山眞男集 第十巻』、岩波書店、2003

³⁰ 前掲書 27、pp20-21

³¹ 斎藤環、『世界が土曜の夜の夢なら』、角川書店、2012

³² 斎藤環、『ヤンキー化する日本』、KADOKAWA、2014

³³ 例えば、それは「美しい国」などと呼ばれるだろう。

「美しい国」とは何か？ 理屈をいう知識人や権利主張をするマイノリティがいない国、民衆はただ生活のことだけを考え、政治に口出ししたりしない国のことだ。

³⁴ このような現代のマゾヒズムの「典礼」の一つとして、19世紀末の発明である映画を加えることもできるだろう。ヒトラーがリーフェンシュタールを寵愛し、『意志の勝利』『民族の祭典』といった国策プロパガンダ映画を撮らせたことは周知の通りである。また比較的記憶に新しい作品としては『ALWAYS 三丁目の夕日』や『フォレスト・ガンプ一期一会』をマゾヒズム的ファンタズムの例として挙げることもできるだろう。

『ALWAYS 三丁目の夕日』は昭和30年代、東京下町の庶民の生活を通して家族の情愛や、人と人とのあたたかいつながりを描いた感動作、とされている。しかし、同時に昭和30年代といえば政治の季節でもあったのだ。昭和35年が西暦1960年であり、60年安保の年であった。当時の首相は岸信介である。この作品には怒涛のように議会前に押し寄せる怒れる国民の姿は描かれていない。

『フォレスト・ガンプ一期一会』はアメリカ現代史を背景に障害を持った主人公の半生を周囲の人々とのふれあいとともに描く感動作、とされている。しかし、この作品には黒人差別や公民権運動、フェミニズムやベトナム反戦運動などはほとんど描かれていないか、あるいは描かれていても、胡散臭いものとして否定的にしか描かれていない。ベトナム戦争が何故起こったのか、戦争の結果どうなったのかについては触れられておらず、戦場で命がけに仲間を救う主人公の活躍が描かれるのみである。なお、主人公の「フォレスト」という名は、KKKの創設者に由来する。

このようにして両者に共通することは、歴史からマゾヒストにとって都合の悪いことは排除し、全く新しい偽の歴史を捏造すること、すなわち歴史の改竄である。彼らにとって現実などどうでもよく自分たちの快原理の充足が優先されるのだ。

³⁵ Gilles Deleuze, *De Sacher Mazoch au masochisme*, Arguments, 5e année, n.21, 1er trimestre, 1961, pp.40-46 (國分功一郎訳、「ザッヘル・マゾッホからマゾヒズムへ」、『月刊みすず』4月号、No526、みすず書房、2005、pp.8-28)

単行本未収録の雑誌論文であるが次の URL でフラン

ス語原文を読むことができる。

multitudes, 「De Sacher-Masoch au masochisme」, <http://www.multitudes.net/De-Sacher-Masoch-au-masochisme/>, 2017年8月8日

³⁶ ここで若き浅田彰によるユング批判を参照しておこう。＜精神分析の中に露骨にウロボロスの幻想を持ち込もうとしているのが、ユングである。彼のいう象徴は、ラカンの象徴界と何の関係もない。それは、想像界の要素、いやむしろ、宗教的に美化された生のゲシュタルトの織りなすマンダラに過ぎないのである＞浅田彰、『構造と力』、勁草書房、1983、p.148